【八月の言葉（令和三年）】

我（おれ）が我（おれ）がの「我（が）」を捨（すて）て

おかげおかげの「下（げ）」で暮（くら）せ

「私の我慢」「俺の努力」「自分の頑張り」との思い。「我」を中心に置いて生きている日常ですが、「我」に終始するならば、狭い視野と了見しか持たない空虚な人生に終わるでしょう。

『実るほど　頭を垂れる　稲穂かな』　実りある人生を送る人は、頭も腰も低いことを表しています。死ぬまで煩悩を捨てきれない私たちですから、この世での完熟は不可能ですが、浄土での完熟に向けて、「我」を捨てられないまでも、まずは足元を見つめてみることから始めましょう。実らずとも、自然と頭は下がってくると思います。

若い頃には尊いともありがたいとも感じられなかったものが、歳を重ねるにつれ、ありがたみを実感できるようになってきます。目がかすむようになっても「おかげ」が見える人間に育てられる深まりこそが、人間としての成熟です。

（吉村隆真著「心の読み薬」参照）